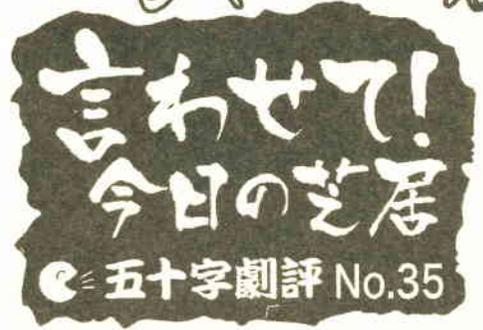


# もやしの唄

テアトル・エコー



▼とても良かったです。もやし作りの大変さや当時の生活について伝わってきて、面白かったです。  
(女性)

【五〇代】  
▼主人公が、いつか倒れるのではないかと、ハラハラしました。妹、弟に腹がたったのは、私だけでしょうか…。  
(女性)

▼ギャグが古くてなじめなかった。名字を何回も間違って真相がわかって一層シラケ。テーマは悪くなかったのに。  
(女性)

▼脚本、役者さん、スタッフの皆さんの愛を感じるステキな舞台でした。ありがとう!!  
(女性)

▼とても素敵な芝居だっただけにセリフの余韻をもう少し楽しみたかった。早すぎる暗転も気になった。  
(女性)

▼じんわりと心温まる演劇でした。久しぶりに観劇で涙が出ました。  
(女性)

▼終演後、心があたたくなくなったのは私だけではないと感じました。見た人はきつと誰かに優しい言葉や感謝を伝えているはずですよ。  
(女性)

▼久里子さんが若くて可愛すぎ。フアザコンの高校生アルバイトだと思ってみていました。もう少し大人の雰囲気があっても…。  
(女性)

【六〇代】  
▼何度もじわーっときて穏やかでいつまでも観ていたいお芝居でした。昭和の舞台作りも良かったです。特にポンプ  
(女性)

▼縁ある、善良である人々。家族。隣人。仕事。雇人の名々の逆さ読みがラストまで、つながり。各のしあわせ。  
(女性)

▼もやし屋の何気ない日常を描いているだけに、普遍的なものを感じる。人は社会的動物であり、一人では生きていけない。そこに生まれる葛藤。1960年代。まだ時間の流れはゆっくりで、人は

優しくなれた。しかし、押し寄せる効率化という波に抗えられなくなり、時間を、そして優しさまでも奪われる。この漠とした不安。それは「変えなくていいもの」までも「変えてしまった」人間の愚かさなのか？人間の尊厳までも踏み越え、進む無人化。そして疎外感。誰のための社会なのだろう。でもどんな社会を望むのか。その選択をするのはそこに生きている一人ひとり。あたたかくて、優しく、いつまでも観続けていたい芝居だからこそ考える。今の社会が持つ理不尽さを変えなければと。  
(男性)

▼もやしの栽培が小規模から工場生産へと移り変わる1960年代が舞台、私の成長期と重なります。私の実家は製飴所で、やはり「じっちゃん」や「あんちゃん」が両親と一緒に働いてくれていま

した。昔がよかったとは言いませんが、まわりは皆一所懸命、余裕じゃないけど許容範囲が広がったような気がしません。ドラマチックではないけどこんなお芝居もいいなと思いました。

(男性)

▼自分の好きな芝居、観たいと思う芝居は、きつと今回のような芝居なのだろうなという思いを強くした。何か大きな事件などあるわけではなく淡々と進んでいく舞台だが、何とも言えない愛おしさを感じた。「もう少しこの登場人物達と一緒にいたい、もっとこの舞台を観ていたい」という思いを強く感じた。7人の登場人物全員に感情移入でき、自然体の演技や互いの巧みな台詞のやり取りなど、とても完成度の高さを感じた。人が人を思いやることや、もやしに注ぐ愛情など、今は薄れてしまった大切なことを、この

作品は思い起こさせてくれる。素敵な作品だ。

(男性)

▼お芝居やさしすぎるー、なんか物足りなく感じた。あれー主役は誰だった。子役が大人になって舞台に出るのを期待してました。ちよつと泣けたけど！

(女性)

▼善き人。善き会話。朝ドラ的なほのぼの感。天国的な世界に癒された。もやし屋の設定がいい味を出していた。

(男性)

▼舞台の三分の一をしめる工場を不思議に思っていました。後半に現れてびっくりしました。手作りのもやしを食べてみたくなりました。

▼ポンプから水がジャーっと出て懐かしかった。便利な世の中になつても残して行くべき事があると気づいた。

▼ものづくりのたいへんさとそのなかにある喜びが自分の日常と重ねあうところがあっても愛おしい舞台でした。

(女性)

▼種をまき、育て刈り取りをするアナログな作業が市民劇場の運営と重なる部分がいとおしく感じ、頑張ろうと思いました。

▼夜中に作業場でもやしの唄が聞こえる場面は、もやし作りに対する深い愛が伝わってきてよかつたのに、大工場に勤務することになった場面は淡々としていて拍子抜けした。もうちよつと観ている側に訴えかけるものがあれば良かった。

(女性)

▼私はこんな芝居が観たかった。日常の生活の中に喜びや悲しみ、優しさが溢れていた。

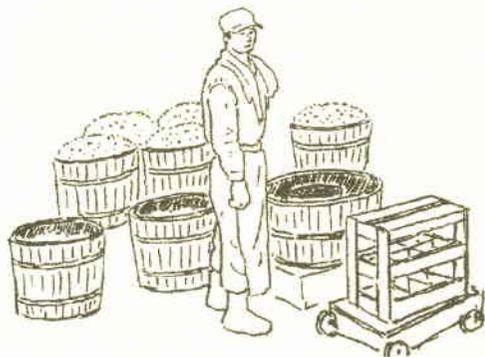
と同時に、私達や社会に対する静かなメッセージも込められていた。芝居を通して知らず知らずの内に温かい涙が出ていた。九里子と恵五郎がみた「光り輝くもやし」のシーンは幻想的で美しかった。

(男性)

▼日常生活の一コマの様子が見られて、カタひじはらずに見ることが出来て、ほんのりとした気持ちで帰ってきました。

(女性)





▼ほのぼのとした例会だった  
と思います。気楽な気持ちで  
観れました。  
(女性)

【七〇代】

▼舞台上で井戸があり実際に  
水を使ったことにまずビック  
リ！そして「もやし」が成長  
するときの音もステキでした  
(女性)

▼安くて、便利な食材とされ  
ているが「もやしの存在は大  
きい」失われゆく私達の生活  
を静かに追求されていた!!村  
松君は経営者として泉商店か  
ら何を学んだのだろう。  
(女性)

▼私は悪い人の出ないドラマ  
が大好きです。「もやしの唄」  
は古き良き時代の郷愁と人々  
の優しさに触れることが出来  
大変寒い日でしたがポカポカ  
の気持ちで帰ることが出来ま  
した。  
(女性)

▼ポンプから水が出た時は時  
代を感じた。音だけでなく水  
を観せることは、難しさがあ  
ると思うが、ホツとする場面  
でもあった。  
(女性)

▼かの小津安二郎映画のよう  
な日常のやりとりは、立ちど  
まり歩をゆるめることの大切  
さを示してくれた。  
(女性)

▼どこかでもり上がりがある  
かと、ずっと待っているうち  
に終わってしまった。喜助さ  
んの息子の話はインパクトあ  
り。  
(女性)

▼家内工業の大変さはあるも  
のの、味わい深さ今だからこ  
そ大切にしたいものがあると  
思いました。ほのぼのとして  
よかったです。  
(女性)

▼喜助と恵五郎がもやし工場  
の中にいたあの場面が忘れら  
れない。しかしあの場面の何  
がいいのかわからない。不思  
議ないい芝居だった。  
(男性)

▼幕が上がった舞台、なつか  
しい!!昭和三十年代の風景  
テレビが欲しい、洗濯機も電  
話機も欲しい物がいっぱいあ  
った。昔を思いださせてくれ  
た劇でした。  
(女性)

▼昭和の良き時代の雰囲気

出ていて、ホツトするお芝居  
でした。善人ばかりで悪人が  
一人も居ない。働く人が報わ  
れない世の中はいやですね。  
(女性)

▼一九六〇年代のころの生活  
の雰囲気とは違い、何か違  
う・違うと見ていました。楽  
しいとも・悲しいとも何か物  
足りないお芝居でした。この  
時代でしたら、個人の物づく  
りの場合は家族でするものと  
思いこんでいましたので、弟  
と妹の身勝手にびっくりです  
ひとつ、よかつたのは、弟が  
兄に「自分にはできないが兄  
さんには、この仕事続けてほ  
しい」と言ったことです。  
(女性)

▼もやしの唄は、ポキツ?ス  
ー?ツンツン??耳を澄ませ  
ど、でも私には聞こえた気が  
しました。優しく、温かくなれま  
した。  
(女性)

▼学校給食で初めて食べた、もやしと魚缶話のころみスープ。大量消費と共に苦労を続けた生産者。暗所で呼吸しながら育つもやしの調理法を考えつつ観劇した。(女性)

▼もやしの唄は、大きくかまえていない芝居だと思って観た。はげしくないやさしいオラがあつたと思います。(女性)

▼舞台の作りが楽しめました。ほんわかとしていた中にも、明るい場面も辛い場面も役者の良さがあり、最後のもやしも絶妙。(女性)

▼静かな流れの芝居で、心とむひとときを覚えました。(女性)

【年代・性別不詳】

▼内容を読んでどうかかな？と思いつつ観劇始め、徐々に引き込まれていきました。なかなか感じる事が多かったです。

▼地味な内容で、これだけ考え感動させられたのは久しぶりです。もやしの成長の効果音が聞こえたのは私だけでしょうか？

編集スタッフから

意外と言っては失礼ですが、「もやしの唄」の劇評投稿数は41件で断トツ1位です。次点はさかのぼること3年。2016年4月例会「幸せの職場」の37件です。どんなお芝居、評価だったでしょうか？ぜひ、旭川市民劇場のホームページで確認してみてください。「50字劇評集」をワンクリック、2013年からバックナンバーをご覧いただけます。あなたの観劇の記録も残してみませんか。

50字劇評「言わせて！今日の芝居」に投稿を！

ここは、会員が「芝居を自由に語る場」です。気軽に感想をお寄せください。

署名 “不審” です。参考のため「性別」・「年代」は記入をお願いします！

字数 “50字” は目安、思いがあふれてもノーカット。原稿はお返しできません。

締切 2019年10月18日(金) (座席シール発行最終日です。)